

ペンテコステ（聖霊降臨日）礼拝

礼拝5月23日（日）

題 『聖霊が降った日』

テキスト：使徒言行録2章：1～13節

今日はご一緒にペンテコステ・聖霊降臨日礼拝を捧げています。

そのことを神さまに感謝いたします。

ペンテコステは地上に主イエスの教会が誕生した日です。主イエスが復活された後、天に昇り、神さまの力である聖霊が弟子たちに注がれ初代教会が地上に誕生したことを記念する日です。ペンテコステとはギリシャ語で50日目という意味ですが、イエスが復活してから50日目に当たります。

この時期は、ユダヤ地方では、お祭りの季節（小麦の収穫）で、全世界に散らばっていたユダヤ教徒たちがエルサレムの町に帰って来ていた時でもあります。

◆聖霊が降る

聖書の1節に「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると」とあります。

弟子たちと主イエスを救い主と信じる人々と一緒に集まっていたようです。今でも、エルサレムの町に集まっていたと言われる家が残っています。集まっていた場所は、大きな家の2階だったようで、アッパールームと言われます。彼らは身を寄せ合うように共に祈り合い、イエスさまのことや言葉を思い出し、礼拝し語り合っていたことでしょう。まだ小さな群れだったようですが、励ましあっていたのです。

そしてペンテコステの日に、聖霊が降ったのです。

聖霊は神さまの力です。私たちを慰めてくださる力、教え悟し、イエスさまへと導いてくださる力です。聖霊を求めることは大切ですが、人間の力で手に入れることができるようなものではないのです。神さまから与えられる力です。聖霊を受けて人は、イエスさまと神さまを信じることができるのだと言った方が正確なのかもしれません。実は洗礼を受けてキリスト者になった人でも、聖霊のことは良く分からないという人がかなりいるようです。皆さまはどうですか？そういう私も、頭では知識では理解しているようでも十分とは言い切れないのです。

神さまの力である聖霊は、風のように肉眼の目には見えません。しかし、心の中に入って来られて、心を平安にしてくださり、悲しむ心を慰め、心をあたたくしてくださるのです。信じる者たちは、神さまとイエスさまに感謝する

と共に聖霊にも感謝しなければならないと思っています。

聖霊が分かるということは、自分が今置かれている状況や、知識や体調や気分、熱心さではないということです。わたしたちは、そのような体調や気分の日々影響を受けやすいのです。

そうではなく、どんな中でも神さまとイエスさまに心向けようとする意識の方が大切なのです。神さまとイエスさまに意識が向いていれば、やがて心に平安が与えられるのです。

さて、弟子たちが聖霊を受けた日に起こった出来事が記されています。

2:突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。

3:そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。

不思議な出来事が起こったのです。「突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ」とあります。長年牧師をしまして、ペンテコステ礼拝を迎える度に、今年は礼拝中にどんな音が聞こえてくるだろうかと思うこともありましたが、ある年は、カラスの鳴き声、ある年は車や救急車の通る音、ある年は工事音の音など様々です。今年はどうかな？と思ってしまうのです。

さて、スペインの画家エル・グレコの描いた「聖霊降臨」の絵があります。ご存じの方もおられますが、徳島の大塚国際美術館には、世界の有名な画家の原画を、陶板に焼き付けたすばらしい美術品が多く展示してありますが、エル・グレコの描いた6枚の絵画からなる「大祭壇衝立（ついたて）復元」も展示されています。その中にこの「聖霊降臨」の絵もあります。コロナ禍が収束したら、車で遠くはないですので私も行ってまた見たいと思っています。（写真参照）

聖霊を受けた弟子たちは、外に出て主イエスのことを語り出したのです。突き動かされるように語らずにはおれなかったのです。

「4:すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」それまでは、ひっそりと身を寄せ合い、仲間内で固まっていたような信じる者たちが、勇気とイエスにある熱い思いを与えられ、外に出て語り出したのです。こうしてイエスの名は広まって行ったのです。

路傍伝道を思います。昔、読んだ山室軍平の「平民の福音」を思います。

彼の伝道する姿を知り、当時心熱い思いになっていました。

ちょうど、この時期には、世界中に散らばって住んでいたユダヤ人や、ユダヤ教に改宗した人々が各地からエルサレムの町に神を礼拝する巡礼のためにやって来ていました。9節以下にあるように、地中海を取り囲むような国々か

らやって来ていました。

5:さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、

今で言えば、地中海近辺の国々、ローマ帝国内の国々から集まっていたようです。

6:この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。

7:人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガラヤの人ではないか。

8:どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。」

弟子たちの話したことばは、外国から来た人たちは、分からないはずだとは思いますが、不思議なことにその大切な核心部分は伝わったのです。不思議なことが起こり、風のように広がって行ったのです。

わたしは、注目すべきは 11 節のことばだと思うのです。「彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

「神の偉大な業」という言葉です。その内容は、難しいことではないのです。イエスの十字架と復活の出来事です。それはすべての人々に対する解放と自由、救いを与えてくれる出来事です。神さまの力・聖霊は人間に自由を与えてくれるのです。

人間を堅く強く縛り付けているこの世の鎖、罪・的をはずした生き方。「こうあらねばならない。」というしばりや強制力や抑圧からの自由、解放なのです。それが主イエスが与えてくださる救いであり、喜び、真理でありいのち、遂には死からの解放、救いなのです。神さまの愛と真理と光に包まれた永遠のいのちへとつながって生きていけるのです。

そこにいた人々は言いました。 12:人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。

13:しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言
って、あざける者もいた。

イエスを伝えた時に、それを聞いている人たちに出て来る反応です。イエスを知ったことを喜び感謝する人もいれば、嘲笑い、拒否する人たちもいるということです。

イエスを信じる者たちは、そのことを失望したり、がっかりしたりもしますが、必要以上に恐れたり、がっかりする必要はないのです。黙っているな、語

り続けよ、です。言葉と行いで伝えるのです。

みなさん、いずれ時をへてコロナ禍も過ぎ去ることでしょう。コロナ禍でも愛なるイエスさまを伝えることはできます。今の時の私たち一人ひとりの過ごし方は、コロナ禍以後へとつながっているのです。神とイエスさま、聖霊の憐みと助けによりコロナ禍後に対して希望とビジョンを持ちながら生きて行きたいと願うのです。

◆聖霊が降る

- 1:五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、
- 2:突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。
- 3:そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。
- 4:すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。
- 5:さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、
- 6:この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。
- 7:人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。
- 8:どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。
- 9:わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、
- 10:フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、
- 11:ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もあり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」
- 12:人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。
- 13:しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。